

2023 年改訂版

# 卓球バレー 審判員ハンドブック



日本卓球バレー連盟

# 《卓球バレー審判員ハンドブック》

## 第1章 審判員の職責

審判員は、大会組織委員会の指導の下に審判業務を遂行しなければならない。

### 1. 審判長

- (1) 各審判グループの業務を組織する。
- (2) ルールの中で詳細を尽くされていない点、あるいは明文化されていない問題について、説明や解決をする。ただしルールを修正する権限はない。
- (3) 試合の進行・審判員を統括する、最終責任者である。

### 2. コート主任

審判長からの業務伝達事項を確認し、自班の審判員を統括する。

### 3. 主 審

- (1) 自分が担当する試合の全体を総括する。
- (2) 副審・線審・得点係と連携を取り任務を遂行する。

### 4. 副 審

主審を補佐する。

### 5. 線 審(必要な場合のみ)

主審・副審を補佐する。

### 6. 得点係

主審が指示する得点を掲示する。  
サービス順を主審に伝える。

## 第2章 審判員の実務

### 1. 主 審

(1) 大会規定事項等を確認する。

#### (2) 試合の進め方

- ① 選手がコート席に着く前に、サーブ選択権（サーブまたはレシーブ）か、コート選択権のどちらかを選ぶかについて、両チームのゲームキャプテンによるトス（じゃんけんなど）で決める。

既に席に着いてしまっている時は、両チーム合意の上、サービス権についてのトスをすることを提案する。

- ② 「両チーム申し合わせ事項がある場合は申し出てください」と言って聞き取りする。主審及び両チームの主将で確認する。その内容とは、「どういう障害があるから、どうして欲しいのかなど」

- ③ 6名のプレーヤーの構成が、大会規定に合っているか確認する（例：ゲームキャプテンは誰か。障害のない選手1名可の場合確認する、など）。

- ④ 両チームによる練習（ラリーを1分以内）を行い、申し合わせ事項の内容を確認する。

※対象者に対する基準と判断は、主審が掌握し決定する。  
（副審は基本的には判定しない）。

- ⑤ 審判団（主審・副審・得点係）の紹介をする。

- ⑥ 「ただいまより、〇〇チームと△△チームの試合を始まります。礼」（副審も得点係も一緒に挨拶する。）

- ⑦ サービス順を告げる。

- ⑧ 「第1セット〇〇チームのサーブで始まります。」と言って、主審の笛の合図とハンドシグナルで試合を開始する。

- ⑨ 第1セットが終了したら、「第1セット、〇〇チームの勝ちです。第2セットを行いますので準備してください。」  
(コートチェンジはしない)。

#### ＜3セットマッチの場合＞

2セット終了時、1対1の時→「セットカウントが1対1ですので、第3セットを行います」

#### ＜2セットマッチの場合＞

2対0の時→「セットカウント2対0で〇〇チームの勝ちです。これでゲームを終了します。礼。」

#### ＜セットカウントが1対1の場合＞

- ・その場で勝敗を決定する場合⇒「セットカウントは1対1ですが、得点率(得失点差)により〇〇チームの勝ちです。これでゲームを終了します。礼。」
- ・リーグ戦などで、他のチームを含めて勝敗を決定する場合⇒「セットカウントは1対1で引き分けです。これでゲームを終了します。礼。」

### (3) 笛吹き的要領

プレーボールの笛吹き後、ラリー中は口にくわえたまま。(手も添えない)。

ラリーを止める時、次の3点を確実に行う。(①②③の順に行う)

- ① 笛を吹く(口から笛をはずす、手に持たない)。
- ② まず、ポイントのコールと手の合図(勝った側のチームに手を挙げ、「ポイント〇〇」とコールする)。
- ③ 判定のコール(声)と反則を示すハンドシグナル(ポイントを指示した手を挙げたまま、もう一方の手で)を行う。

#### (4) 電子ホイッスルの要領

プレーボールのホイッスル後、ラリー中は手に持ったまま。(指も添えておく)。

ラリーを止める時、次の3点を確実に行う。(①②③の順に行う)

- ① ホイッスルを鳴らす。
- ② まず、ポイントのコールと手の合図(勝った側のチームに手を挙げ、「ポイント〇〇」とコールする。
- ③ 判定のコール(声)と反則を示すハンドシグナル(ポイントを指示した手を挙げたまま、もう一方の手で)を行う。

#### (5) 審判の要領

- ① 主審の立つ位置について  
ブロッカー2人の間に入り、サポートに近付き、上の方から台全体を見るようにする。
- ② 申し合わせ事項について  
申し合わせ事項はチーム同士が合議で決めるのではない。(相手チームに「よろしいですか?」と了解を得るのは間違い。)主審が当該選手に対して必要と判断した場合認められる。そして主審はそのことを相手チームに通知する。

##### <申し合わせ事項の内容とは>

「障害があるため、どういう打ち方になるので、何の反則を免除してほしい」のかを確認する。

「どの程度免除するか」は、主審の裁量(基準と判断)と責任で判定する。

たとえば、「ホールディングを免除してほしい」にもかかわらず、強打した場合、これはホールディングの反則を取るべきである。

- ③ 「主審の見にくい位置」また「反則を確認したが、どちらの反則か判別できなかった時(迷った時)」の判定について。

- ⇒ 笛を吹きプレーを止め、判定コールする前に副審に意見を求める。  
副審も判らないときは、自分の判定をコールする。又はノーカウントとする。
- ④ 判定コール後、判定ミスのアピールなど、状況が混乱しそうな時。  
副審に意見を求め、先の判定と異なる場合、訂正する。  
副審が判らないときは、判定の通りとする。
- ⑤ 副審が反則を認め、笛を吹いた時、主審は反則の内容を確認し、改めて宣告(ポイントのコールと判定のコール)する。

### <要領>

副審とアイコンタクトを取り、副審の意見を確認する。副審の意見を採用する場合、または別の判定(自分の判定)を採用する場合、いずれの場合も改めてジャッジ(「ポイントのコールと判定」もしくは「ノーカウント)のコールをする)。

- ⑥ どちらかのチームが14点になった時、「セットポイント」「マッチポイント」を通告する。
- ⑦ 笛の音量について  
聞こえるようにしっかりと吹くが、むやみに強く吹かない。(周囲の選手にはかなり不快に聞こえる場合がある。)周囲の状況をよく把握し、必要音量をコントロールするのも審判員の技術の一つである。
- ⑧ 試合前後の挨拶をきちんとする。  
試合終了と同時に、すぐに立ち上がり移動を始め、挨拶するタイミングを逃してしまうことがよくある。その時には、すぐに「試合終了の挨拶をしますので、もう一度お座りください。」と両チームを指導する。

## 2. 副 審

### (1) 主審を補佐する。

- ① 反則を認めた時は、速かに笛を吹き、ポイントチーム側の手を挙げて、もう一方の手（反則チーム側）で反則の内容を示し、どの選手が何の反則があったのかを主審に伝える。
- ② 判定について、主審から「意見伺い」があった時、回答する。（例：副審側のサポート付近を通過したボールについて、アンテナに当たったかどうか。）
- ③ サービスが行われる時、姿勢を低くして、ボールがネットに触れないかを確認する。
- ④ 主審から見えにくい位置、たとえば、副審側のサポート付近、また主審の見えにくい位置に座っている選手（4名の選手）のプレーを特に注意して見るようにする。
- ⑤ 試合の進行に影響のない範囲で下に落ちたボールを拾う。

### (2) 留意事項

- ① 副審が反則を認めた時は、笛を吹くが、ワンクッション待って吹く。

#### 〔理由〕

反則を発見（確認）して、すぐに吹くと、主審とほぼ同時に2回笛が鳴ることが起こりうる。

主審より副審の方が経験豊富な場合、主審が吹く前に副審が吹いてしまうこともある。これでは、どちらが主審かわからなくなるし、選手も主審に不信感を持つ。

反則をとるかとらないかの「反則有無について境界線のプレー」については、主審の判断に任せ、副審は判定しない。

（笛は吹かない）

- ② 一方、主審より副審の方が経験豊富な場合、副審は主審に対して「育てる」指導力が要求される。

その場合、両チームに「主審が初心者であるので、副審が笛を吹くこともある」ことを告げ、「主審を育てる」ことへの理解と協力を求めることも必要になってくる。

- ③ サービス順の主審への伝達について  
副審が「サービス順早見表」を携行して主審に伝達するケースが多いが、主審・副審共プレーに集中するため業務が煩雑になり、次のサーバーの順を告げるのに時間を要することがある。  
そこで、サービス順の伝達は、得点係の役割とすることが望ましい。

### 3. 線 審(必要な場合のみ)

#### (1) 主審・副審を補佐する。

- ① エアボールについてのみジャッジする。  
② エアボールにて、コート外に出たり、コート外で選手の体またはラケット等に触れた場合は「ボールアウト」なので、手又は手旗を挙げて主審に知らせる。

(笛・電子ホイッスルは使用しない)

#### (2) 留意事項

- ① 線審がエアボールについてのジャッジを行っても、最終的な反則の判断は主審が行う。

##### 〔理由〕

線審はあくまでも、主審・副審のサポートする立場であり反則を取るか取らないかの「反則有無については」主審が判断する。

### 4. 得点係

#### (1) 得点板の表示。

- ① 主審が手を挙げコールしたチーム側に 1 点を加える。  
② どちらかのチームが 14 点 (デュースの時も同様) になっ



た時、主審に「セットポイント」または「マッチポイント」を伝える。

**(2) サーブ順の通知**

「サーブ順カウンター」を使用、若しくは「サービス順早見表」を携行し、主審にサーブ順を伝える。

サーブを行うチーム側の手を挙げ、口頭でサーブ順の番号を告げ、指でそのチームの何番目(1～4番目)かを示す。

**(3) その他**

試合がスムーズに進行するよう務める。

試合の進行に影響のない範囲で下に落ちたボールを拾うなど。

### 第3章 判定の基準と要領

1. 得点とサービス順の間違があった時（気が付いた時）  
得点に合わせる。「サービス順早見表」を活用する。

#### 2. 宙に浮いた打球について

相手コート（A チーム）からの打球がネットの下をくぐり、ノーバウンドでB チームに戻ってきた時。

	Bチームコートの状況	反則の有無	判定（ポイント）
①	コートに着地	インボール （有効打）	プレー続行
②	コート内でラケットに当たり、コートに着地	インボール （有効打）	プレー続行
③	コートに落ちて、ボールアウトになった	ボールアウト	A チーム
④	コート内でラケットに当たって（ワントッチ）ボールアウトになった	ボールアウト	A チーム
⑤	コート内で体に当たった	ボディボール	A チーム
⑥	コート外に出た	ボールアウト	B チーム
⑦	コート外で体に当たった	ボールアウト	B チーム
⑧	コート外でラケットに当たった	ボールアウト	B チーム

- ※ 打球が速く、相手コートに入ったボールが「着地した」のか「着地しなかった」のか判断が難しいケースがよくある。  
これは、審判員の技術の問題でもあるが、まず「強打され

たボールは、転がらずに宙に浮いていることが多い」ということを踏まえ、同時に「早い球は、打球時にホールディングによる可能性がある」ということも念頭に入れ判断し、見極めることが大切である。

⑤～⑧の4パターンの判定を線審が主審・副審を補佐しジャッジし、主審は線審の意見を参考に反則を判定する。

※ 強打で相手コートがボールが通過した時の目安（ビデオカメラによる検証データより）

- ① ネットに引っかかった場合、相手コートに着地していることが多い。
- ② ネットに当たらなかった場合、相手コートに着地していないことが多い。

### 3. 台の継ぎ目が原因でイレギュラーした打球について

- (1) どちらかのチームに不利な状況でなければ、続行する。
- (2) どちらかのチームに著しく不利な状況であると判断した場合、ノーカウントとし、その理由を説明する。

〔著しく不利な状況〕とは

- ① 継ぎ目に沿ってサポートに当たった。
- ② 継ぎ目で大きく跳ねて（イレギュラーバウンド）相手コートに入り、ボールアウトになった。
- ③ 継ぎ目で大きく跳ねて相手コートに入ったボールがラケットに当たり、ボールアウトとなった。
- ④ 継ぎ目で跳ねて、コートの外に出た。

〔留意点〕

試合前に継ぎ目に段差があれば調整しておく。（養生テープなどを継ぎ目に貼る）

#### 4. 「ホールディング」の判定について

- (1) 「ホールディングになりやすいラケットの持ち方や扱い方」はあるが、判定はどこまでもラケットで打球した結果を判定する。
- (2) 手に当たったボールは、手に吸収され、ラケットで打球した時とは異なったはじき方（クッションに当たるような）をするので、ホールディングの判定をしまいやすい。  
そこで、ボールを明らかに手で押さえつけたり、あるいは手の上を転がった時（これは、ドリブル）など以外は、安易にホールディングの判定をしないよう留意する。
- (3) ホールディングを「取る」か「取らない」で迷った時の判断材料（参考）
  - ① 打球が強ければ、取る。
  - ② 打球が強くても弱くても、相手チームに不利な状況があれば取る。
  - ③ 打球が強くても弱くても、相手チームに不利な状況にならなければ、続行する。

#### 5. 「スタンディング」の判定について

お尻が椅子からずれたり、椅子が動いたり、また椅子の脚が浮いても反則。

#### 6. 「手首付近に当たったボール」の判定について

手に当たったボールは、くるぶしより先であっても、一見「ボディボール」に見えてしまうことがある。また、手首が服で隠れていると、当てられた本人ですらわからない事もある。

したがって、審判員は慎重に見極め、判定する。

## 7. 「ドリブル」の判定について

- (1) 打球の直前に手がビビってしまい、1回しか当たっていなくても、審判も含め本人以外の人にはドリブルに見えてしまうことがある。
- (2) ボールに対して2人のプレーヤーがラケットを近づけ、両方のラケットに1回ずつ瞬間に当たるとドリブルに見えてしまう場合があるので、慎重に見極め判定する。

## 8. サービスの時、ボールを置く位置について

コートラインに向かって、まっすぐ座った位置から見て、サーバーの肩幅で、無理なく手の届く範囲。

ただし、身体障害により置けない場合、置く位置については主審の判断に委ねる。

《サービス順早見表（A）》

合計点	先攻		合計点	先攻	
0	1		21		6
1		2	22	7	
2	3		23		8
3		4	24	1	
4	5		25		2
5		6	26	3	
6	7		27		4
7		8	28	5	
8	1		29		6
9		2	30	7	
10	3		31		8
11		4	32	1	
12	5		33		2
13		6	34	3	
14	7		35		4
15		8	36	5	
16	1		37		6
17		2	38	7	
18	3		39		8
19		4	40	1	
20	5		41		2

《サービス順早見表（B）》

合計点		先攻	合計点		先攻
0		1	21	6	
1	2		22		7
2		3	23	8	
3	4		24		1
4		5	25	2	
5	6		26		3
6		7	27	4	
7	8		28		5
8		1	29	6	
9	2		30		7
10		3	31	8	
11	4		32		1
12		5	33	2	
13	6		34		3
14		7	35	4	
15	8		36		5
16		1	37	6	
17	2		38		7
18		3	39	8	
19	4		40		1
20		5	41	2	

《卓球バレー審判員ハンドブック》

2013年6月1日 制定

2014年7月1日 第2刷

2019年7月1日 改訂

2023年4月1日 改訂

発行 日本卓球バレー連盟  
ホームページ <https://japan-tvf.com>



編集 日本卓球バレー連盟 審判委員会